

島から世界へ

——幕末地理学者柴田収蔵の知のあゆみ

森山 武

はじめに

柴田（新発田）収蔵（1820–1859）は、佐渡の小港・漁村に四十物屋（小魚加工業）の息子として生まれながら、三度に渡る江戸遊学を経て、漢方そして蘭方の医師となり、さらに地理学の専門家として幕府天文方蕃書和解御用、そして蕃書調所絵図調書役に採用された人物である。主な業績としては、世界地図『新訂坤輿略全図』（1852年、図1）と北方図『蝦夷接壤図』（1854年）の刊行、また官撰の『重訂万国全図』（山路諧孝編 1855年刊）への作図担当としての貢献が知られている¹。彼のこの辺境から中央への進出、職業的・身分的「変身」は、徳川後期社会における在方知識層の成長と、彼らの中央の「知」との交流を支える社会的仕組みの充実、そして西洋列強との接触によって喚起された19世紀日本の知的社会的変動を象徴するものと言える。

柴田収蔵をいわゆる地方文人の典型として取り上げたのは塚本学である。「烏賊と地球図」という見出しで、居村で生業に携わりながらも広い知を求めてやまない在方知識人の一例を収蔵に見出している²。また、赤木昭夫は伊東玄朴の蘭学塾生のひとりとして収蔵の行動を取り上げ、速水健児は在村医としての収蔵を例に佐渡における書籍の貸借のネットワークを分析している³。英語では筆者前作が収蔵の江戸遊学の分析を行い、幕末期の教育機会、蘭学生生活を多面的に描いた⁴。これらの研究に史料を提供したのが収蔵の日記で、残存する7年分が翻刻刊行されており、付随する成田美紀子の収蔵伝記と田中圭一の解説がその理解を助けてきた⁵。

これらの先行研究に示唆されているように、歴史研究における柴田収蔵の生の重要性は、徳川後期において地方がいかに知のネットワークにつながっていたかを考える材料をわれわれに提供することにある。収蔵の知的・文化的活動には、居村ベースのつながりと、それを越えた

¹ 三好唯義編『世界古地図コレクション』（河出書房新社、1999年）、122、128頁参照。

² 塚本学『地方文人』（教育社、1977年）、184–187頁参照。

³ 赤木昭夫『蘭学の時代』（中央公論社、1980年）、40–55頁参照。速水健児「近世佐渡における書籍を巡るネットワークと医師・海運業者——柴田収蔵日記を中心として」『東北大学国史談話会』第47号（2006年）、29–55頁。

⁴ Takeshi Moriyama, “Study in Edo: Shibata Shūzō (1820–59) and Student Life in Late-Tokugawa Japan,” *East Asian History*, no. 40 (2016): 27–50.

⁵ 田中圭一編『柴田収蔵日記』全2巻（上下）（新潟県佐渡郡小木町町史刊行委員会、1971年、以下上下巻をそれぞれ日記A1、A2とする）。成田美紀子「柴田収蔵について」日記A2、333–376頁。田中圭一編『柴田収蔵日記——村の洋学者』全2巻（平凡社、1996年、以下第1巻、第2巻をそれぞれ日記B1、B2とする）。田中圭一「解説柴田収蔵の生きた時代」日記B1、11–34頁。この小論では広く普及している平凡社版の日記B1、B2をなるべく用い、そこに含まれていない史料を日記A1、A2から採るものとする。また、引用文中、句読点・「」・『』の使用、（ ）内の送り仮名や人名の補足は引用書によるもの、〔 〕による補足は筆者によるものである。

佐渡各地とりわけ中心地相川町の役人・医師・文化人とのネットワーク、さらに江戸遊学で形成された師弟・学友関係という三層のサークルがある。私の興味は、この重層する文化的構造、そしてそれを部分的に結合させる仕掛け、そのネットワーク上での人と情報の移動に影響を与える歴史的社会的変動、これら三点にある。そこで、この小論では、収蔵の世界地理への関心に焦点を当て、それが彼の生を取り巻くどのような人的・社会的・歴史的環境の中で育まれ、そして江戸での世界地図の出版にまでつながったのかを考えたい。

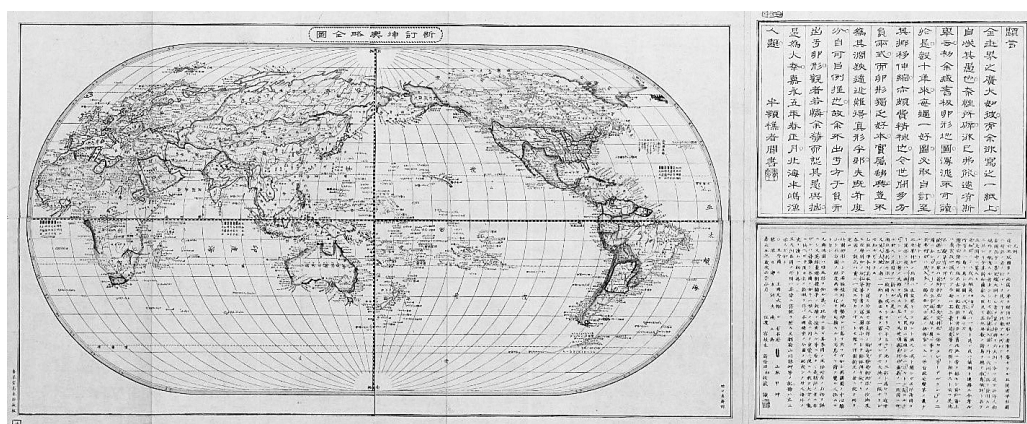


図1 新発田収蔵『新訂坤輿全図』江戸：春草堂、嘉永5年(1852)(早稲田大学図書館古典籍総合データベースより)

1 佐渡奉行所と世界地理

収蔵の「天保十三年〔1842〕年中出府雑録」⁶に1月18日付で「自分用向覚」と題したメモがある。この年、収蔵は23歳。自分の住む宿根木村でおそらくは父親の代理として村行政に携わっていたらしく、村人やその廻船の出国許可申請、また宗門人別帳の提出などの公用で、佐渡奉行所のある相川へ12回も出張している。その第一回出張の際の書留と日記に挿入された私用の「やることリスト」である。その冒頭に収蔵の地理的関心が明らかに見え、そしてそれがどういう人物とのつながりの中で触発されたかのヒントがある。

一、石井氏江御年始御礼。彩助子へ「分間道里之図」相頼(み)置(き)候も相聞合(せ)、外に「蝦夷国之図」を借(り)る事。

一、同人の「オロシヤ通船之図」並(に)川路(聖謨)様「地球図」之写を借(り)而写す事。外に北見氏「天球之図」同所並(に)当国之度数を写す事。是は伊能勘解由(忠敬)之測量有り。……。⁷

ここにあがっている数種の「図」が具体的に何を指すのか特定は難しいが、蝦夷、ロシア船、

⁶ 日記 B1、39-134 頁。

⁷ 日記 B1、43 頁。

地球、天球といったことばが収蔵の関心の広がりを示し、また「分間道里」「度数」という用語から彼の地図製作への意欲もわかる。別のページには「毛引」「コンパス」などの言葉や「縮図尺之図」「山の高さを計る術」「紙に経を引く具」などの挿画も見える。収蔵には「金毘羅詣船路之記」⁸という天保10年(1839)の旅日記があるが、それとこのメモを比べれば、この佐渡の青年の地理的認識が3年の間にいかに変貌したかに驚く。

収蔵の知的地平の変革は、冒頭の「石井氏」、佐渡奉行所地方付絵図師を務める石井夏海(1783-1848)からの刺激と指導、そして江戸への遊学を起爆剤とする。天保10年夏からの約2年間、収蔵は江戸で越後高田藩の儒官、中根半仙の下で書と篆刻を学んだとされる。この遊学も石井夏海が収蔵の才能を見出し、村の寺院の和尚とともに勤めて実現したらしい⁹。石井は地元相川出身の地方文人の筆頭と言っていい人物で、江戸遊学も行い、狂歌や戯作で鹿都部真顔、曲亭馬琴、式亭三馬などと交流があった。また、絵画は谷文晁、測量・油絵は司馬江漢に学んだとされる¹⁰。収蔵の地図・地理への関心は遊学前に石井によって引き出されたのか、あるいは江戸での見聞が導いたのかははっきりしないが、帰国後の1842年には石井を師とし地理学へ傾倒していく。夏海は蔵書も多く、「地球図」「天球図」を自作している。

夏海の長男が「彩助」、石井文海(1804-1849)(別号九淵など)、父同様、奉行所の絵図師を務める。収蔵は文海から絵地図製作の実技的な訓練も受けている。石井家は収蔵にとっての第一の学校として機能した。1842年日記より例を見よう。「[10月]五日 石井氏へ行(き)男九淵子に逢(い)て、同人より地球図及び八線を見せ下され[……]」「六日 セツ過より石井氏へ[……]男九淵子在宅にて画図御取調(べ)に付手伝いたし[……]夏海君と話などいたし九ツ時寝る。[……]今夜御奉行御所持の奇石を見る」「七日 今日は父子共に御在宅にて、拙子は九淵子御絵図取調(べ)の手伝いたすつもり所、伊能(忠敬)氏の絵図色々間違等あって九淵子の測量と不相合ゆへ止る」¹¹。石井父子は奉行所の仕事として佐渡絵地図の改訂作業中であつた。参考にするのは1803年測量の伊能図「佐渡国沿海全図」だが、文海自身の測量と合わないところが多々あつて作業が進まない。伊能図批判を見守る収蔵。この瞬間においては日本で最高の地理学演習を受けていたのではないだろうか。

この伊能図も含め、注目すべきは収蔵が石井父子との関係を通じて奉行所経由の情報を入手していることである。先にあげた「川路様地球図」とは、奉行として1840年から1年間在島した川路聖謨(1801-1868)が江戸から持ち込んだものと思われる¹²。日記には「[夏海]より御役所地球図を借りて写」したという記述もある¹³。佐渡は徳川期を通じ一国が幕領で、行政と金銀山を統括する佐渡奉行所では、江戸から派遣される奉行と組頭の下で、世襲の地役人が行

⁸ 日記 B2、341-357 頁。

⁹ 成田「柴田収蔵について」337-339 頁。

¹⁰ 石井夏海の江戸遊学は1804年から約2年とされる。「石井夏海・文海年譜」、佐渡博物館編刊『昭和54年度特別展石井夏海・文海展図録』(頁なし)。ほかに相川町史編纂委員会編『佐渡相川郷土史事典』(相川町、2002年)、66-67頁、成田「柴田収蔵について」、335-336頁、山本修之助「石井夏海宛江戸文人の書簡」『越佐研究』24号(1966年)、42-51頁を参照。

¹¹ 日記 B1、100-101 頁。「八線」は三角関数表。

¹² 川路の佐渡赴任は自身の道中日記在勤日記がある。川路聖謨(川田貞夫校注)『島根のすさみ——佐渡奉行在勤日記』(平凡社、1973年)。但し、石井父子や収蔵の名は登場しない。

¹³ 日記 B1、119 頁。

政実務を担当、さらに「絵図師」や「山師」などの技能職を町人から「雇」として採用していた¹⁴。夏海を介してか、収蔵は地役人筆頭の「広間役永井氏」と懇意にしており、また「北見氏」「露木氏」などとも書籍の貸借をしている。さらに主要港小木に駐在する役人「畠山氏」「西川氏」、そして自村宿根木にある「浦目付所」の「坪井氏」などという地役人連中とも交流があった。佐渡奉行所はまた「江戸旅宿」を本郷に持っており、地役人はここをベースにして江戸出張をしている。江戸から来る奉行や組頭とは別に、地役人は地役人で中央に結びついていた。また本郷の出張所は江戸遊学中の佐渡人にとっても国元の情報センターだったようだ。収蔵ものちに頻繁に訪れている¹⁵。

収蔵が奉行所地役人ルートで入手した地図・地理書のひとつに「(司馬) 江漢先生銅板の地球図」がある。天保14年(1843)6月6日、夏海が「露木氏」より借りたものを収蔵に見せてくれた。二日後に貸してもらい、自宅に帰ると憑かれたように複製を始める。日記に「写す」とあるのが28日にも渡る。7月22日に「写し終」わり、23日から27日まで「彩色」、「裏打ちす」「表紙を拵る」と進み、完成するのが8月4日である¹⁶。上杉和央が明らかにした18世紀知識人の間にはじまる地図収集のネットワーク¹⁷は、19世紀半ばには佐渡にも、そして世界地図をも対象にして広がっている。

地図以外には大黒屋光太夫とロシア情報が収蔵の関心を引いている。夏海所蔵の「寛政丑年〔1793〕 亜魯齋亜国漂流人口書写」、そして役人永井氏より「勢州幸太夫始乗組之者漂流之記」を借りることに記載している¹⁸。しかし、江漢の『地球全図』(1792年刊)も光太夫一件も50年近く前のものであり、時事的な問題とはまだ結びついていないと言える。

2 村人と世界地図

収蔵の知的世界は石井夏海・文海父子を得て佐渡奉行所の役人ネットワークにつながっていったと言える。しかし、居村ではそれはどういうつながり、広がりの中にあったのだろうか。収蔵の村、宿根木は狭い入り江に百姓家77軒、寺院4(時宗の称光寺とその三支院)神社1が密集する小さいコミュニティである¹⁹。例として、まず上の司馬江漢の地球図について見てみたい。天保14年8月4日、収蔵は複製品が完成すると自分の読み書き師匠であった「終平様」に見せに行っている。次に見せたのが「抱雲師」。そのあとは、近村の医師「周徳子」の弟が見せて欲しいと訪問して来たり(8月14日)、また村の「与一左衛門殿」「孫四郎殿」などに見せたりしている(9月15日)。使われている敬称にも留意しながらこれを見てみると、「終平様」こと、高津終平は261石積の船を持つ海運業者で村の知識人。敬称「様」が柴田家(屋号「長五郎」)より格上であることを示している。宿根木村には終平のような廻船持ち11名が計13艘を操り、

¹⁴ 『新潟県史通史編』(新潟県、1988年)第3巻57-59頁及び第4巻72頁参照。

¹⁵ 日記B2、215、294、298頁など参照。

¹⁶ 日記B1、214-241頁。

¹⁷ 上杉和央『江戸知識人と地図』(京都大学学術出版会、2010年)。

¹⁸ 日記B1、45、127頁。

¹⁹ 宿根木本村に隣接する新田村などを入れると百姓家は合計120軒。日記B1、5頁参照。

主に大坂への年貢米輸送を請け負っていた。終平は収蔵の手習い師匠でもあった²⁰。一方「殿」が使われている与一左衛門などは、同格の家の主人であろう。つまり、少なくとも村の有力者の中には収蔵の世界地理への興味がある程度は共有されていたと言える。指摘されているように、海運業という外につながる生業が地理への興味の土壌であろう²¹。収蔵日記の備忘録には「赤泊村吉兵衛子所持」として「蝦夷松前並エトロフ唐太クナシリ諸島全図」「朝鮮之図」「琉球三省並三十六島之図」「仙台林子平撰『三国通覧地略程全図』」などがあげてある²²。伝手を求めて借り受けるつもりだったのだろう。赤泊も北前船が寄港する佐渡の代表的な港である。また1843年の日記には「権兵衛隠居製したる松前の大坂迄之図を縮図」したともあり、船乗りと絵地図作製の親近性を想像させもする²³。

僧侶と医師も村に居ながらも外のネットワークにつながる存在であった。抱雲は江戸から来ていた時宗の僧で、この時は村の称光寺の支院に滞在中。また本寺筋にあたる四日町大願寺でも収蔵と交流している²⁴。収蔵は数か月後の第二回の江戸遊学の際には、本寺にもどる抱雲と同道し、浅草日輪寺の支院安称院を宿にする²⁵。日輪寺は時宗の江戸「触頭」だから、明らかに檀那寺称光寺からの人的ネットワークが収蔵の遊学を助けているのがわかる。

収蔵の日記は村における日常的な文化的集いをはっきりと描写している点で興味深い。一例を示そう。

〔1843年2月〕十一日 家厳、家弟等たかり場へ行（く）。昼後雪時々降る。朝遅く起（き）終平様へ行（く）。相川を送りたる書画帳、料紙持参頼（み）置（く）。孫兵衛殿に而（高）藤彦国君及長松院様と飲酒。歓喜院へ行（き）大順様を被頼たる弘法大師執筆の絵を写し初（る）。后大順様と飲酒、日暮に同所を出、藤八どのへ寄（る）。夜五ツ頃帰宅。酒に酔たれば直に寝る。²⁶

時々雪の舞う2月、父と弟は魚の加工のため浜の仕事場に行くが、長男収蔵は遅く起きてから、高津終平を訪れ、書画を依頼。次に、これも村の有力者である「孫兵衛殿」宅に行き、息子で友人の「彦国君」を訪ねると「長松院」（称光寺の三支院のひとつ）の和尚も来ていて一緒に飲酒。次に「歓喜院」（もうひとつの支院）へ行き、ここの僧大順に頼まれた写画を始める。大順と飲酒後、もう一軒の有力者「藤八〔高藤八右衛門か〕どの」宅へ……。このような記述が頻繁に現れることをどう理解するべきか。収蔵やここに集う仲間の個人的な性向もあろうが、農村とは異質の漁労・海運業村落の文化が背景にあるのではないか。日々勤勉を旨とする農業生産地域では、朝から酒を飲んで仲間と遊ぶことは祝祭日以外には社会的に許されないだろう。しかし、海で生計を立てるものには別の尺度があり、漁村・港には「遊民」を受け入れやすい素

²⁰ 田中「解説」14-19頁参照。

²¹ 速水「近世佐渡における書籍を巡るネットワーク」44-47頁参照。

²² 「天保十三年年中出府雑録」、日記B1、42頁。

²³ 日記B1、146頁。

²⁴ 日記B1、211-216、247-254頁参照。

²⁵ 日記B1、286-326頁参照。

²⁶ 日記B1、151頁。

地があるのではないだろうか。このような村の文化サロンづくりに寺院と僧侶が大きな役割を果たしていることも注意したい。

3 地図製作の試み

収蔵の世界地図製作の企てはいつ始まったのだろうか。日記上では天保14年（1843）の正月に「武右衛門殿と地球之図を仕立等に取り掛る」「補いに掛る」「彩色」という記事が見られる²⁷。「武右衛門」は近くに住む同好の人物か、あるいは収蔵に世界地図を依頼したのか。その後6月から8月に上で述べた司馬江漢図の複製作業が出てくる。そしてこの時期こそが、塚本が地方文人の日常の例として切り取った収蔵の「烏賊とりの作業と地球図写しを一日に両立させる生活」である²⁸。父祖から続く家業をこなしつつ、余技として学芸を修める。多くの在方知識人はこの「業余風雅論」を戒めとし家業を優先させたが²⁹、収蔵は自らの家業を変えることで知への志向をさらに進めようとする。すなわち、医師への「改業」である。古来、百姓身分からでも条件が許せば医師と僧侶・神官になることはあったから、これはある意味既存の価値体系内での企てであった。

天保14年の8月25日、収蔵は初めて父に江戸への医学修行を相談。家族・親戚の承諾、そして佐渡奉行所の出国許可を得て、9月22日収蔵は第2回の江戸遊学へ旅立つ。天候が許さず33日も「日和待ち」をするというアクシデントもあったが、閏9月をはさんで10月25日より高田藩儒中根半仙に再入門を果たしている³⁰。その後、日記には中根塾で漢方医学の基本テキスト『医方大成論』の講義を受けていることが出てくるが、一方で街の本屋では『解体新書』なども手に入れていることが載り、蘭方にも興味を持っていることがわかる³¹。そして地図については、やや唐突に次の記事がある。「〔12月〕四日〔……〕今日書肆南苑閣主人来り、地球図板行之事聞合せたれば、草稿致（し）相談可致由被申。則同人へ銅板を出し而一覽に入（れ）る」³²。つまり、収蔵はこの時点ですでに江戸で世界地図を出版することに意欲をもっていたことが判明する。しかしこの後、この件は触れられずに1843年日記は終わり、残念ながら翌2年間の日記は散逸してしまっている。残存する収蔵の書簡手控によると、収蔵は天保15年（1844）9月には中根半仙宅から出て寺に下宿、そこから伊東玄朴の象先堂に通っている³³。蘭学塾に籍を置くことで新たな材料も手に入れたのではないかと考えられる。

この第2回江戸遊学後、収蔵は宿根木に戻り村の寺院の一室を借りて医院を開業し、今度は佐渡在島の医師の知的ネットワークにもつながっていく³⁴。「弘化三年丙午〔1846〕日記」「弘化

²⁷ 日記 B1、141–145 頁。

²⁸ 塚本『地方文人』185 頁。

²⁹ 地方文人の「業余風雅論」については、高橋敏『日本民衆教育史研究』（未来社、1978 年）、194–195 頁、杉仁『近世の地域と在村文化——技術と商品と風雅の交流』（吉川弘文館、2001 年）、46 頁、Takeshi Moriyama, *Crossing Boundaries in Tokugawa Society: Suzuki Bokushi, a Rural Elite Commoner* (Leiden: Brill, 2013), pp. 85–86 等を参照。

³⁰ 日記 B1、256–328 頁参照。

³¹ 日記 B1、338–360 頁参照。

³² 日記 B1、352 頁。

³³ 「書翰類」日記 A2、308–310 頁。

³⁴ 収蔵の医師ネットワークは速水「近世佐渡における書籍を巡るネットワーク」、34–43 頁に詳しい。

四年丁未〔1847〕日記」「弘化五年嘉永元年戊申〔1848〕日記」には、収蔵が自村で新米医師として村人の診療に励みながら、世界地図製作にも意欲を燃やしていることが出てくる。自作の世界地図は二つ作られたようだ。まずは弘化3年（1846）の1月から「彩色」（1月21日～2月23日）「縮図」（3月18日～21日）「草稿」（3月26日～4月3日）「裏打ち」（4月3日）「校合」（4月4日）という作業が記録されている。この間には診療に来た患者「彦兵衛」「勘二郎」に作品を見せたりもしている³⁵。そして1年半後、バージョンアップされたものだろうか、「自製の地球図を写し始める」（弘化4年11月20日）という記述があり、今度は「楢円地球図」と「両円地球図」、二つのタイプの世界地図が製作される（完成12月15日）³⁶。「両円地球図」について言えば、おそらくそのベースは幕府天文方高橋景保編の『新訂萬国全図』（1810年刊）だろう。「高橋之地図」を「甚七郎様に見せる」「坪井様に見せる」などという記事がある³⁷。収蔵はこの官版地球図を江戸遊学で入手してきたのか、あるいは佐渡奉行所から石井家経由で写しを手に入れたものか。後者の方が可能性が高いと思われる³⁸。

収蔵が後年出版する『蝦夷接壤図』もその草稿らしき地図が弘化3年（1846）11月27日から翌年3月24日の間に製作されている³⁹。ベースにした地図はよくわからないが、1843年日記に「蝦夷之図」「松前蝦夷地之図」などの貸借が記録されており、また1846年日記では赤泊の吉三郎に「蝦夷地之図」の借用を頼んでいる⁴⁰。地名などで参照したと思われる資料として、「蝦夷略記」「魯西亞国一件」「蝦夷俗談」「北夷紀事」などの読書や貸借、写本が記載されているが、筆者はそれらを特定することができない。地図以外にも収蔵は『各国所領萬国地名捷覧』という世界各国の地名ハンドブックを嘉永6年（1853）に出版するが、この草稿も1846年4月に編まれている。この種本はおそらく箕作省吾の『坤輿図識』（1845年刊）かと思われる。草稿の執筆の直前、収蔵はこの新刊本を4日にわたり読んでいる⁴¹。

第2回遊学後の日記には、収蔵の地図・地理書の出版の企てを後押ししたと考えられる時事的背景が所々に現れる。風雲急を告げる幕末外交、そしてその情報を受ける知的アンテナ、人的ネットワークがこの遊学を通して収蔵に備わったということであろう。例えば、弘化3年（1846）9月20日の記事では伊東玄朴塾の学友「栗田氏」から受け取った手紙を、「琉球へ仏蘭西船三艘、英吉利船一艘何れも軍艦渡来致、右に付薩州侯にも帰国」、「長崎へも仏蘭西船三艘」、「浦賀港へも北亞墨利加〔……〕兵艦二艘来着」、「実に方今可憂之一大事なり」などと書き写している⁴²。これは順に、琉球来着のフランス船（1844年3月）、イギリス船サラマン号（1845年5月）、長崎へのフランス艦隊セシユ来航（1846年6月）、そしていわゆる浦賀ビッド

³⁵ 日記 A1、263–287 頁参照。

³⁶ 日記 A1、473–479 頁参照。

³⁷ 日記 A1、263、478 頁。

³⁸ 佐渡博物館編「石井夏海・文海年譜」に「1841 年 文海 川路奉行所蔵の官板地球輿地全図を写す」とあるから、これが「高橋之図」かもしれない。

³⁹ 日記 A1、369–402 頁参照。

⁴⁰ 日記 B1、137、156 頁。日記 A1、258 頁。

⁴¹ 日記 A1、286、289–294 頁参照。

⁴² 日記 A1、352–353 頁。ただし「栗田氏」は象先堂門人録では確認できなかった。伊東栄『伊東玄朴伝』（玄文社、1916 年）。

ル事件（1846年閏5月）を指しているものと思われる⁴³。

佐渡にも緊張が走っている。嘉永元年（1848）4月の記事。19日、「当節異国船〔佐渡最北端の〕鷺崎之洋中三里許近く来り、丹後八之助船出會（う）由」との話を聞いたので、翌日「御役家へ行（き）異国（船）渡来之事話」したところ、浦目付の「坪井様」より「三月十五日奥州三厩へ一艘渡来、〔……〕追払（い）たるに〔……〕大砲を發し」などというニュースも聞く。宿根本近くの沢崎（佐渡の最西端）でも「夫々相備へたる」態勢とのこと。さらに23日にまた浦目付役所に行くと、坪井は上司に「若異国船渡来之節は〔収蔵を〕携え船へ」乗り込めと「指図」されたと言う⁴⁴。この時点での収蔵の蘭語能力は非常に限られたものだったと思われるが、それでも江戸帰りの蘭学者として役人から頼られていたのだろう。4月28日には、「異国船〔……〕酒田洋中に而虚砲三發」発射、このため鶴岡藩より新発田藩、そして新発田藩より佐渡奉行所へ人員の派遣の可否を聞いてきたという記事も載る⁴⁵。北辺も騒がしくなっている。

収蔵が手にしている書籍にも変化が見られる。1840年から始まったアヘン戦争の顛末を伝える「阿片始末」（斎藤竹堂著、1843年）。これは写本を作って医師仲間へ送ったり、師の高津終平に貸したりしている⁴⁶。「去年浦賀へ入津のアメリカ船の一件書」というのは、まさしくビッドル事件のレポートであろう。小木港の役人より借りている⁴⁷。同様に小木の役人から借りて写したと思われるのが「甲辰年長崎へ入津蘭船一件書」。これは1844年7月のオランダ王の開国勧告書に関する文書と考えられる⁴⁸。志筑忠雄の「鎖国論」もこういう文脈で読んだり貸したりしていると思われる⁴⁹。しかしながら、収蔵日記には、異国船の接近やそれに対する幕府の外交政策について感情的な記述や意見の表明がほとんど見られない。残り2冊の日記、「嘉永三年庚戌日記」（1850年）、「安政三年江戸日記」（1856年）、なканずく開国後となる後者の日記においてもそうである。

4 江戸の「知」との対話

嘉永3年（1850）3月26日、収蔵は3回目となる江戸遊学に向かう。伊東玄朴に再入門、4月20日より象先堂での学生生活が始まる。正式な目的は蘭方医学の習得であり、収蔵は名目上佐渡奉行所詰医師という身分を得ての修行であった⁵⁰。しかし、収蔵の興味は最初から医学に止まっていたはいなかった。収蔵は日記の他にこの年の金銭出納帳「嘉永三年諸雑費」⁵¹を残してくれていて、それを使い江戸到着後年末までの9か月間に購入した書籍や絵図を分類してみ

⁴³ 藤田覚『近世後期政治史と対外関係』（東京大学出版会、2005年）、280–281頁、上白石実『幕末期対外関係の研究』（吉川弘文館、2011年）、85–91頁参照。

⁴⁴ 日記 B2、57–58頁。

⁴⁵ 日記 B2、60頁。

⁴⁶ 日記 A1、271–273、288頁。

⁴⁷ 日記 A1、400頁。

⁴⁸ 日記 A1、430頁。

⁴⁹ 日記 A1、402頁。

⁵⁰ 日記 B2、172頁。

⁵¹ 「嘉永三年諸雑費」、日記 B2、257–80頁

表 1

| | | |
|--------|------|-------------|
| 書および漢詩 | 17 点 | 支出計 9,785 文 |
| 世界地理 | 7 点 | 3,510 文 |
| 医学 | 6 点 | 2,287 文 |
| 絵図 | 14 点 | 1,763 文 |
| 科学 | 4 点 | 1,728 文 |
| * 蘭語 | 3 点 | 510 文 * |
| 兵学 | 1 点 | 200 文 |
| 雑類 | 22 点 | 3,121 文 |
| 計 | 74 点 | 22,905 文 |

金額は、収蔵がこの年の日記に記録している両替例を用い金 1 両＝銀 62.02 匁＝銭 6,192 文とし、すべてを文換算で集計した。*「蘭語」にはテキスト『和蘭文典後編』(セインタキス)の価格が抜けている。

ると表 1 のようになる（別表に書名・購入書店・価格などの詳細を記載）⁵²。

表中まず書および漢詩関係が多く金額も高いことに目が行くが、これは収蔵の興味がまだ篆刻や書にあったと同時に、おそらく法帖などの資産価値という面、そして芸術的な要素があるものは写本では意味がないということも考慮しなければならない。世界地理・海外事情の分野では、次のような書籍が江戸到着早々に購入されている。4 月 15 日、山村才助による新井白石の世界地理書の大改訂版「訂正増訳采覧異言」（1802 年成立）。5 月には、英国のアジア侵略を概説する嶺田楓江『海外新話』（1849 年刊）。6 月、司馬江漢の自作世界地図の解説本『地球全図略説』（1793 年刊）。7 月、斎藤拙堂の海外雄飛日本人伝記である『海外異傳』（1850 年刊）。また、世界各国地理歴史ガイドの最新版である安積良斎「洋外紀略」（1848 年序）は、塾の助教である伊東玄桂（玄朴の甥）より借り、それを写本業者に頼んで複製を作っている⁵³。

情報や書籍があふれかえる江戸の中で収蔵がぜひやりたいと思っていたことのひとつは、佐渡で自作した地図が出版に値するものか確かめることだっただろう。チャンスは思いがけなく早く訪れた。入塾し幹部や寄宿生に挨拶を済ませた三日後、すなわち嘉永 3 年 4 月 23 日の夕方、塾頭の池田洞雲が古賀謹一郎（1816–1884）のもとに連れて行ってくれた。古賀家は祖父精里（1750–1817）以来、幕府昌平黌儒者を務めてきたが、父の侗庵（1788–1847）が海外事情にも興味を持ちだし、それをついで謹一郎も西洋通の儒官として見られるようになっていた。洞雲は古賀の勉強会に参加していたらしい⁵⁴。洞雲に紹介してもらった収蔵は早速「古賀謹一郎先生へ〔……〕自製する処の楕円の地球図を示して検討を」お願いしたという。「古賀氏地理に詳に原書□□□の極精密の図を出して示さる。亦『武備志』等の図を蘭書と比較せしものを見る」とあり、謹一郎が収蔵にヨーロッパ製の地図を見せてくれたことがわかる。「夜洞雲と和泉橋□□□に飲みて帰る」⁵⁵。江戸の第一人者と面談した後の興奮が伝わってくる。

⁵² 書籍以外の費用の分析は次を参照。Moriyama, “Study in Edo,” pp. 41–48. 佐渡出発以後の年末までの 9 か月間で合計 120,713 文相当の支出が認められる。書籍費用より多額なのが飲食代で 38,469 文、全体の 31.9% を占める。

⁵³ 日記 B2、274、275 頁。写本料金は 2 回に分けて 210 文と 288 文。後者は 28 枚分とある。

⁵⁴ 小野寺龍太『古賀謹一郎』（ミネルヴァ書房、2006 年）。洋学への接近、洞雲らとの会合は 26–43 頁参照。

⁵⁵ 日記 B2、189 頁。

この後、収蔵は謹一郎に急接近し、事実上の弟子となる。5月7日、謹一郎より洞雲に手紙が来て、前回受け取っておいた収蔵の地図を精査したから来るようにと言われる。

午後古賀へ行(き)先生より予が地球図に不審なる所に印し紙を付(け)て示す。[……] 千八百四十五年の原図に南亜墨利加大地の南方に地を見出したるあり。又北亜墨利加州の北方も漸く開けし地を図す。地球図及琉球図、朝鮮図、満州の精図、大清会典の図、龍州□□□図等の図数十種を見る⁵⁶。

謹一郎は親切にも収蔵の地図に付箋を貼り問題点を指摘、そして参照すべき多くの地図を「数十種」も見せてくれたのである。さらに6月10日「古賀先生より他より地図」をもっと入手したので「来りて見給へ」という伝言が入る。今度はドイツ製の世界地図だった。二人で上述の1845年版の地図(オランダ製)と比較。結局、収蔵はオランダ版から南米大陸の南方部分、北米大陸の北辺などを写す。夕食もごちそうになり、また「先生が写せし南亜墨利加之総図[……]及オーストラリー之図を借りて帰る」。収蔵はその夜も翌日も自作の世界地図を修正している(「古賀より借りたる和蘭刻之図を以て楕円図之稿を改正す」)⁵⁷。収蔵の草稿図上の問題は現在のカナダ北部からグリーンランド、南米の南端から南極半島の部位、そしてオーストラリアの形状にあったらしい。

「嘉永三年庚戌日記」は、その後も古賀のもとでの収蔵の学習と世界地図の修正を記録している。「古賀へ行き先生より地球図を借りて楕円図之稿をなす」(7月23日)。同様の記載が翌日と翌々日も。「先生地名を読みて予を助く」(7月25日)という記述は古賀の親密な指導を想像させる⁵⁸。当時、自分が所属する塾の先生以外の学者からも指導を受けたりすることは珍しくはなかったと報告されている⁵⁹。しかし、古賀へのこれほどの傾倒は収蔵自身で気にするものがあつたようで、「毎日至るも外聞如何(わ)しき故暫く古賀に至る事を休む」と自制の文を書いている⁶⁰。日記はその年末までの古賀との交流を記録するが、残念ながら収蔵の世界地図がどのようにして完成し、嘉永5年(1852)の序をもって『新訂坤輿略全図』と題し刊行されたかを語る史料は発見されていない。成田は出版費用が12両3分と5匁だったとするがその典拠を示していない⁶¹。

おわりに

上で述べた嘉永3年(1850)の柴田収蔵と古賀謹一郎との接触が語るものは大きい。離島佐渡から上って来た地図愛好家は、中央学府の第一人者に面談し、彼が持つ資料と知識を見て二人の間にある差に愕然としただろう。しかし、古賀が門前払いをしないどころか、懇切丁寧に

⁵⁶ 日記 B2、192 頁。

⁵⁷ 日記 B2、200–201 頁。

⁵⁸ 日記 B2、212 頁。

⁵⁹ 海原徹『近世私塾の研究』(思文閣出版、1983 年)、259 頁参照。

⁶⁰ 日記 B2、212 頁。

⁶¹ 成田「柴田収蔵について」、366 頁。

指導をしたのはなぜか。それはやはり二人の間に学問的対話が成立するだけの知の共有があったからではないか。差は存在した、しかし、それは近づき得る範囲のもの、古賀から見れば指導の手を差し伸べたくなるものだったからであろう。

収蔵をその地点まで連れて行ったのは何か。これまで見たように収蔵のこの知的な歩みは、徳川後期にある程度広く観察できる社会的文化的発達を背景にしている。すなわち、生家の地位を基盤とする居住コミュニティでの社会的つながりとサポート、手習いから始まり江戸などへの遊学を頂点とする庶民教育システム、さらに学問・文芸各分野において師とする人間を得て学習する機会とそこから広がる知的ネットワークへの参加などである。しかし同時に、地理学・地図製作に向かった収蔵の事例は、徳川期の百姓身分地方在住者の学問への関わりとしては、やはり特殊と言わざるを得ない。

この特殊事例を成り立たせた要因のひとつとして佐渡の環境がある。離島ながらも、佐渡奉行所という幕府出先機関によって中央行政とはひとと情報の流れがあり、武士の代わりを務める地役人を介して収蔵は情報や地図などを手に入れている。また、民間の北前船がつなぐ各地からの情報もあり、地理・地図は廻船問屋にとって身近な関心だったと思われる。もうひとつの収蔵の特殊事情は、まさに日本において世界地理・地図に更新が求められる時期に生きたことである。伝統的に許容された医学修行を名目にはしているが、江戸で世界地理の最新知識を求め、地図の出版を目指す行為は19世紀半ばの歴史の変動期を鮮やかに反映していると言えるだろう。

謝辞：シンポジウム企画運営・参加各位、特に発表にコメントをいただいた佐野真由子氏、出版関連情報をご教示くださった石上阿希氏、またオーガナイザーの将基面貴巳氏に感謝申し上げます。

別表：柴田収蔵嘉永3年(1850)江戸での書籍・絵図関係購入リスト

| 日付 | 場所 | 店 | 題 | 分野 | 値段* |
|-------|-----|--------|---------------------------|---------|-----------------|
| 04/09 | 蔵前 | 屋台 | 『古今奇事一覽』『朝鮮征伐』 『江戸町尽』 | 雑類 | 48 文 |
| 04/12 | 浅草 | 文淵堂 | 『囊中錦心』2冊 | 漢詩 | 252 文 |
| | | | 林則徐『太上感應篇』 | 雑類 | 200 文 |
| | 上野 | 屋台 | 『成親王百家姓』 | 書 | 150 文 |
| 04/14 | 浅草 | 須原屋伊八 | 『改正蛮語箋』二 | 蘭語 | 10 文 |
| | 池之端 | 岡村庄助 | 『(九成宮) 醴泉銘』一 | 書 | 300 文 |
| 04/15 | 浅草 | 朝倉久兵衛 | 『増訳采覧異言』1-9 | 地理学 | 2,048 文 |
| 04/17 | 池之端 | 岡村庄助 | 『朱柏廬治家格言』1 | 雑類 | 172 文 |
| 04/21 | 浅草 | 朝倉久兵衛 | 『快雪堂法帖』 | 書 | 3,246 文 |
| 04/23 | 日本橋 | 須原屋茂兵衛 | 『欧陽詢楷書千字文』 | 書 | 12 文 |
| 04/25 | 池之端 | 岡村庄助 | 『清枕志祖楷書千字文』 | 書 | 998 文 |
| 05/02 | 柳原 | (一) ** | 『当世(名家?) 評判記』 | 雑類 | 72 文 |
| 05/05 | 池之端 | 住吉屋茂兵衛 | 「豊公信長公焼香之図」3枚 | 絵図 | 100 文 |
| 05/06 | | 学友藤田弘庵 | 『掌中和漢年代記(集成)』 | 雑類 | 80 文 |
| 05/15 | 池之端 | 岡村庄助 | 『夢英大師碑』 | 書 | 1,935 文 |
| 05/23 | | 学友池田洞雲 | 『海外新話』 | 地理学 | 初回支払い分 774 文 |
| | 池之端 | 岡村庄助 | 『米庵行書臨本』一帖 | 書 | 549 文 |
| | | | 『江戸下谷辺切図』 | 絵図 | 120 文 |
| 06/02 | 池之端 | 岡村庄助 | 『清猗詠隸書千字文』 | 書 | 520 文 |
| | | | 『江戸切絵図』 | 絵図 | 132 文 |
| | | | 「世の中あんど」の摺物 | 絵図 | 32 文 |
| 06/08 | 両国 | (一) | 『日本橋南切図』 | 絵図 | 132 文 |
| 06/09 | 池之端 | 岡村庄助 | 『虚字解』二 | 雑類 | 300 文 |
| | | | 『(古今) 図書集成坤輿典』 | 雑類 | 300 文 |
| | | | 『薩州漂客見聞録』一／ 『求竜説一求言録』一 | 雑類 | 48 文 |
| 06/12 | 池之端 | 岡村庄助 | 『(古今) 図書集成初篇』一 | 雑類 | 150 文 |
| 06/13 | 御成道 | 英文蔵 | (伊豆?) 七島方角絵図 | 地理学 | 72 文 |
| 06/21 | 昌平坂 | (一) | 『地球全図略説』(司馬江漢) | 地理学 | 132 文 |
| | | | 『七島日記』(欠本) | 地理学 | 180 文 |
| | 池之端 | (一) | 『日本橋北切図』 | 絵図 | 132 文 |
| | 池之端 | 岡村庄助 | 『菱湖麴生帖』 | 書 | 572 文 |
| 06/27 | | 学友上村周聘 | 『病学通論』 | 医学 | 566 文 |
| | 両国 | 玉巖堂 | 『開卷百笑』 | 雑類 | 238 文 |
| 07/02 | 蔵前 | 屋台 | 『絵本万国新語』 | 雑類 | 38 文 |
| 07/03 | 下谷 | 朝倉屋喜助 | 『天民』臨本 | 書 | 549 文 |
| 07/05 | 蔵前 | 田中長蔵 | 『植学啓原』 | 科学(植物学) | 599 文 |
| 07/09 | 蔵前 | 田中長蔵 | 『病名彙解』五 | 医学 | 774 文 |
| 07/16 | 池之端 | 岡村庄助 | 『薬品手引草』 | 医学 | 649 文 |

| | | | | | |
|-------|-------|--------|-------------------|----------|----------|
| 07/21 | 池之端 | 岡村庄助 | 『海外異伝』 | 地理学 | 180 文 |
| | | | 絵本横山本 | 雑類 | 64 文 |
| 08/09 | (一) | (一) | 難病療治錦画 6 枚 | 絵図 | 148 文 |
| 08/12 | 池之端 | 岡村庄助 | 『方円星図』 | 科学 (天文学) | 300 文 |
| 08/24 | 上野 | (一) | 『詩文千字文』 一 | 書 | 200 文 |
| | | | 『上うけ用文』 一 | 書 | 16 文 |
| 09/01 | 池之端 | (一) | 当時流行三幅対 | 書 | 48 文 |
| | | | 摺物「骨折鋸鋔療治」 | 医学 | 48 文 |
| 09/10 | 池之端 | 岡村庄助 | 『地球小図』 一 | 地理学 | 124 文 |
| 09/12 | 両国 | 屋台 | 『柳樽』 2 冊 | 雑類 | 32 文 |
| | | (一) | 欲と云ふ獣の図 | 絵図 | 28 文 |
| 09/15 | 池之端仲町 | 岡村庄助 | 『妙々奇 (談)』 前後篇 4 冊 | 雑類 | 300 文 |
| | | | 『砲術語匠』 | 軍事 | 200 文 |
| 09/19 | 池之端仲町 | 岡村庄助 | 『和蘭天説』 「天球図」 | 科学 (天文学) | 649 文 |
| 09/26 | 池之端仲町 | 岡村庄助 | 『客杭日記』 | 書 | 90 文 |
| 10/09 | 池之端仲町 | 岡村庄助 | 『江戸人名録』 | 雑類 | 164 文 |
| 10/10 | 田原町 | (一) | 『篆書千字文』 | 書 | 48 文 |
| | 浅草 | 朝倉屋 | 『外科要寸』 | 医学 | 150 文 |
| | | | 『医原枢要』 | 医学 | 100 文 |
| | | | 『和蘭語注解』 | 蘭語 | 500 文 |
| | 池之端仲町 | 岡村庄助 | 『雲庵將軍碑』 | 書 | 300 文 |
| 10/17 | 浅草 | 朝倉久兵衛 | 「平賀実記」 | 雑類 | 200 文 |
| 10/18 | 広小路 | 屋台 | 『奇事拾記』 | 雑類 | 32 文 |
| 10/26 | 湯島 | (一) | 『諸役大概順』 | 雑類 | 72 文 |
| | 池之端仲町 | 岡村庄助 | 亥年之曆 | 雑類 | 48 文 |
| 10/28 | 池之端仲町 | 岡村庄助 | 江戸絵図 | 絵図 | 200 文 |
| | 蔵前 | 田中長蔵 | 『天之柱』 一 | 雑類 | 250 文 |
| 10/29 | 池之端仲町 | 岡村庄助 | 『セインタキス』 | 蘭語 | (一) |
| 11/01 | | 友人高木玄仲 | 「東岳鶏之画」 一 | 絵図 | 499 文 |
| 11/04 | 広小路 | (一) | 餅搗絵 2 枚 | 絵図 | 40 文 |
| | | | 膝栗毛絵 4 枚 | 絵図 | 124 文 |
| 11/09 | 両国 | 屋台 | 笑本及欲之画 | 絵図 | 32 文 |
| 11/16 | (一) | (一) | 「大小児及琉球人来朝行列之図」 | 絵図 | 44 文 |
| 12/17 | 御成道 | 英文蔵 | 『菌譜』 2 冊 | 科学 | 180 文 |
| 12/28 | 日本橋 | 屋台 | 『煎茶小述』 | 雑類 | 64 文 |
| | 御成道 | 英文蔵 | 『しりふごと』 2 冊 | 雑類 | 250 文 |
| | | | 合計 | | 22,905 文 |

「嘉永三年諸雑費」(『柴田収蔵日記 2』東洋文庫、257-280 頁) より作成。

* 値段は文換算。 ** (一) は記載なし。